和蘭醫薬問答

乾

特別
ヤ9
957
1

甲二一二四号
ヤ9
957
1

建部清菴先生
杉田玄白先生 徒復書牘

和蘭醫事問答

杉田伯元先生校正

14092
39-6597

求己文庫

和蘭醫事問答序

余少小從清菴建部翁遊。翁居常嘆曰。我瘍醫之術。自古及今。和漢無有至者。而本邦近世以是名家者。其傳大率自崎陽象胥。其為說也。拾和蘭人之唾餘。補以漢醫之論說。所謂續貂以狗尾者。亦奚足講哉。不若親學和蘭之言。以

譚其書則尚有得其真者乎吾惡得其人與之從事而吾老矣恐不能償其志矣曩塾生衣關伯龍游學東都中間帰省其親迺言都下有請和蘭醫學者翁迺録疑問數條附諸伯龍伯龍還都遍質之乎諸名家而其説類如尋虱捕景湯然其髣髴之不得也爾後三閲歳伯

龍再帰省告以有若狭醫官鶴齋杉田先生者首唱和蘭書翻譯之業也翁踧然起坐曰有是哉時乎昇平二百年文命敷于四海輦轂之下豈無崛起之士乎浸録前問授伯龍伯龍還而叩諸鶴齋先生先生覽之喟然嘆曰四海以肩千載旦莫志之相符一何如此也吾嘗

我世而得此人則吾之鍾子期哉遂爲
闡明其義裁答復之寔安永癸巳歲也
翁得之也喜而欲狂不啻拱璧反復不
釋手者數月舊痾殆愈爾來郵書往來
率無虛月焉然尚未舍然欲千里命駕
親自把臂問難切劘焉以老疾故弗得
果因使令子亮策氏及余茂質行束脩

於其門乃得共留于塾中與聞其說嗚
乎和蘭人之來貢於我邦百有餘年
于今其際稱瘍醫者何限而恬然不之
省者果何心哉今也翁而疑之先生而
明之其人則千里其意則一契豈可不
謂百世之嘉會千載之奇遇矣哉蓋文
運斤慈天生斯人假之良緣而使木鐸

於天下焉。而吾儕小子。得親炙二先生而與此盛事也。何幸如之。吁嗟此舉也。和漢千古所未曾有。而今而後。我醫之道。始披雲霧覩白日者。豈翅瘍醫云乎。推其所由。二先生之書為之階也。因與同社阪其馨等。輯録其往復書札。以為二卷。問者與令嗣田士業。再更校訂。名曰和蘭醫事問答。不敢秘于帳中。授諸剞劂。以公于世。若有豪傑之士。由是興起者。此道之行可跂而竢也。則此書雖一小冊子哉。其猶泰山之雲。膚寸而合。不崇朝而雨於天下邪。生民之被其澤者。其可勝言乎。乃二先生之所以荅天寵靈而補聖化之萬一者。其昉於此役

歟吾儕小子豈可不戮力而從事於斯
哉

寛政七年乙卯春三月八日

東奥　大槻茂質謹撰

慶應義塾図書之印

和蘭學の初業なる
夫学ぶ者の難能所なる
所を勉力在り且敢
て敢て衰退せざる所なり
情実多端反
復錯綜混淆の乎
宗旨移換等閑
思ひ
君主の言葉の義
又
風格
の盛枯
失法
収法
紫橡
彩色の盛自
敢て情
為

慶應義塾図書之印

以仕事を生土親雪を美に美然
事に乃て為に悦を義也又能其
秋を祭祀業時を享歟悔恨
憤事を生業を忘を忘
乎月薬を示を乎不
嘗を忘乎方寸を中之義也凡
孝を難主孤独
而已去人士業を已に父を高

建を去男國東為幡蛛子お
東都富翁殷富を茶業を示
省混淆取捨集下示而乃已て
而為示孝男已男風楊を感枯
魚を然先財産清貧お曉直に
父を産主曳岩に仮に法架橋
裁業必曰示に乃不而為悦男
示に乃至裁乃至業を社を祭

祀業附、ゝ享歟。男子而以蔭子孫
ゝ吉額男子ゝ奚益而厚吉凶ゝ
ゝ命之。雲玄伊男子視ゝ恥我。
ゝ男子而乃雖。亦拖法度乃
拖法與士業男子孝年哉乃爲ゝ
旦ゝ而祝之。數命ゝ學。新以ゝ
徼乃出於男子ゝ男業ゝ素ゝ
奚而代年。俗男ゝ志嗜欲性肖

年。而亦以孩子猶男志業。色者存
南大人命之。而存性汝ゝ出。新
法家塾。以圓亦柏。而亦以孩子等
男業哉。呂士業爲父ゝ命。
麼亦ゝ初。亦孩子等法斯。男解
充ゝ孩男孝年。加其孝乎乃爲。
呂而以孝年乎而生。男孝乎而生。
呂而以孝年乎乃爲。孝難亦男孩

仰而寫字籠而
集孫宋子孫毛
氏詩茶梓之
文意一部全士業
出其神之山彫刻
之志而宋之集
乘稼之篇哉夫
之意乎生文
以及棧利之勤
哉法云之掃

四

四方之文何言
之雖予序特
省
寛政甲寅之秋
東都 梶園字言撰

和蘭醫事問答

附言

一此書ハ建部杉田二先生往復ノ書簡ニシテ當時門人塾中ニ輯録シ名ケテ蘭學問答或ハ瘍醫問答ト稱ス余顧フニ此書ノ論說原ト和蘭瘍科ノ問難ニ端ヲ起ストイヘトモ然トモ通編ノ大意醫流ノ宗源ニ係レリ故ニ今改メ題シテ和蘭醫事問答ト云

一俗牘固ヨリ旁點ヲ加フベキニ非ス然トモ門下ノ幼

蒙初學ノ為ニ間〻此ヲ施スノミ識者ニ在テハ則
為ニ蛇足ト矣

一 和蘭語上下ニ混同センヿヲ恐ル故ニ「」如此勾
畫ヲ設ク

一 此書冊ヲナシテ後チ門人及ヒ書肆屢〻請フ本ニ
上セントス然ヒ二先生敢テコレヲ許サズ而モ笑
テ曰瑣〻タル小言豈何リ不汚トスルニ足ンヤト無
幾モ建部先生老テ奥ノ地ニ沒ス杉田先生ノ業ハ
日〻月〻ニ隆盛ニシテ從游之徒如雲千里負笈

來集リ社盟ニ與ル者日一日ヨリ甚シ先進ノ
塾長必ス先ツ此書ヲ後進ノ徒弟ニ示シ其
レヲシテ斯業ノ來由ヲ知ラシム或ハ先生ニ此書
アルヿヲ傳聞シ來リ請モノ少ナカラス而ノ彼此傳
播轉借シ啻ニ謄寫ニ勞スルノミニアラズ紙葉散逸
原本ヲ失フヿ數回ニ及ベリ且ツ傳寫ノ際謬誤
モ亦少シトセス故ニ余憂之ヿ久シ因テ屢〻上梓ニ
ヿヲ請フ然ヒ先生許サズ其言モ〻タ如前余頃
竊ニ此レヲ家兄清菴ニ謀ル 兄姓ハ建部名ハ由水字亮策父祖ノ號ヲ襲テ

清菴ト称ス奥ノ一關ニ住マ兄固ヨリ其宿意アルヲ以テ深ク此舉ヲ欣躍ス因テ相俱ニカラ戮セ考訂シテ強テ此ヲ剞劂ニ附シ以テ家塾ニ收ムト云

寛政乙卯夏六月

杉田勤士業識

和蘭醫事問答巻之上

清庵建部先生問書

阿蘭陀人年〻日本エ來ルニ外科ト云ハ見ユレ共内科ト云ハ見ユズ

阿蘭陀ニハ内科ノ醫者ハナキヿナリヤ

阿蘭陀トイヘ共風寒暑濕産前後婦人ト児ノ病ナキヿハ有マジヿトぐク膏藥油藥ノ類バカリニテハ療治ナラヌ筈ナリ然レハ内科ナノテナラヌヿナル日本ニテ阿蘭陀流ト称スル考

皆膏藥油藥ノ類バカリニテ腫物一通リノ療治ノミスルコトヲ審ナリ長崎奉行ヘ從テ往ク鎗持ノ八藏挾箱ノ六助モ一ケ年彼地ニ居テ帰レハ外科ニナリテハ安六齋ナドヽ名ヲ付キ阿蘭陀直傳ト称スル心得ガタキコトヲ也長崎ヘ往タリモ阿蘭陀醫ノ弟子ニナリ療治ヲモ見習ヒ彼國ノ醫書ヲモ習ヒ成ヘカラズ但シ長崎ヘサヘ往ケハナルコトナリヤ

阿蘭陀本草ノ書有コトハ聞及タレモ僻邑ニテハ見ルコトナラズ右ノ書ヲ見レハ艸木ノ氣味功能モ本草綱目ナドノヤウニ知ルコトナリヤ

阿蘭陀醫書モ多渡リタルヤ

右之四ヶ條再拜之上諸名家ヘ御質問委ク書付御申越されい拙攷度い此外阿蘭陀醫學之事ニ付てハ年来不審之事多有之い拙久しふその面徒に暮さに出し前後諸雜いろいろ失念もかなり日老廢之身の上再會も期し難く覺ヘ居る事も拙攷度い存ぜるを集録之事任せ度い願ハ

今日本にて阿蘭陀外科傳書ハ八巻書十六巻書新寄ノ六巻書なりと云ふ名ノ抵しの之翻安有り外科者流

尊き家秘とかれる阿蘭陀醫の著述の何れも通詞を
頼に色々の事を聞書きたるものとのみやはかりの明醫
より聞たる文来醫事如何なる通詞の口はきにまかせ
沙一日本人と阿蘭陀人との稟賦の不同なるを不知して地の
寒暖の遠ひ衣食の異なる事をも不辨滅法善惡を問ふ事
なれハ阿蘭陀醫も己れ用ひられたる事計を見聞て
言ひ出す事なる書ハ巻書十二巻書なりいふ傳
書となり多るものなるへし去ハ何の書も同
事のみ[illegible]なれを本まして唐の醫書の如科の部ハ

拔集て広論を集合せるものと見るや正真の阿蘭陀流
とハいふべからさるへし
阿蘭陀の文字ハ日本のいろは同然の音計にて字義ハ考とるに足ハたとひ
阿蘭陀醫書を能よみても詞の義理と彼地の風俗事躰とを不知して通じ
へからさる事多し俗言俗語も有へし時のもの詞も交ひ其名も國々に異の
称なる所遠有へし病名も醫者の称する所と民間の呼ぶ所
古今称呼の遠有若や日本の阿蘭陀流外科其分たるを名
家傳と称し吟味せる事不審や患老阿蘭陀傳書や
いふもの拾五部取集めたるを藥名いろ〳〵遠ひ有

白蝋をヘツキワス（ミヘツテワス）トウルハンアル乳香をトウセス（トウ
リス）ハヌシ（レシイ）ウイロク（ステキス）ステラスカラメイタ如此
白蝋乳香二藥の名數多ひて考まハ異名數多有
國〻村里の方言古今称呼の遠雅名俗称も有〻外科皆流傳
書ひ秘〻伝へ不正誤を不正家傳と号し博く吟味を経ず
何ま是何ま此なるや知〻ず元来阿蘭陀の醫書といふ
ものを傳授ひ膏藥油藥計をあるひてをれて一流をなす
きるなを〻〻阿蘭陀の醫書渡アて彼邦の國字言語
を知らしハ用ゑ立ざるを〻〻唐まて鳩摩羅什ら佛經を翻

譯ひたるを〻〻日本まも学ぶ識ある人出て阿蘭陀の醫書を
翻譯し〻〻譯字ハ正真の阿蘭陀流ら出る唐代
書ひかひしハ外科の一家を立て婦人小兒科抔の妙術も
出〻〻其正授ハ天正年中毛利弟八とゆ人南蠻〻渡彼地
十七年居て火術鉄炮の妙法を傳〻帰朝の後樵木民部と
改名〻其流を樵木流といひ種〻の妙術名譽をひ〻
ハ〻後加州ゑ仕官〻其子樵木又左衛門ゑ祖績ず
聞ま火術鉄炮の極秘傳ハ弟子井上源次郎といふ人
傳ま〻て仙其ゑ伝ふ其流法ハ回藩ゑ残て本多吉左衛

とて伝て妙術を極む世に放火とて根元此火術より出るなり又それより以前の事なるに年代は中像常なとい人とも南蠻へ渡て婦人科醫術を傳へ奇効妙験有り由其醫術の法とも仙蓬の試て中目道味といふ家に傳て人世に日本一家妙術の祖となりたりと雖伝ふ所流なる唐の書に加へ一家を立るなり阿蘭陀流の外科は阿蘭陀名乗いすれも内科なれは皆唐の書より抜出て集合傳會したるは慨嘆すべきの至なり夫婦内科の役の拙なるは内科の先へ立て

なり其独道を行まゝ拙なるは如唐にハ古来より瘍醫疾醫と分て明の陳實功清の祁坤の輩各撰著有て獨歩の術なる書面の通り明白に古人の語も用て痔或は及甚外に外之痔則必根于其内也と有て膏藥油藥計て外より貼るに堺ひなる事なり夫婦内藥を用ひさすれは内科は腫物の寒熱虚実とて別ぬ故外科より相談を仕無なはなるに成も悪意地なる内科は外科の言事を不用初めなるは我意を張て病人を誤る事多し石隠已外科内科を

ずれハ利を射る為めなる間敷と思ふて又悪性なる者共ハ
誹謗を致し聞ハ凡夫の淫猥しハ嗔恚(シンイ)を起すなり
自然と信仰を破る事やと思ひて外科一家なるを
せ絶ハ絶るハ如なれとも程ハ知なる今近解魔法師や
賣(ヒイス)坊主同前にて神ともいハ仏ともいハ天台ともい
ふ真言ともなく御幣を振りて真言呪しを衣を
着して中臣祓と唱へ半上落下の渡世業にて薬を賣
術を鬻き一生を暮しなるハ残念なる浮土法華ち
道心坊さへ宗旨ならるに渡世ばかりにて法度の害(カイ)にて

何の宗旨もなく人をたぶらかし頑学知識の高僧と賣
主坊主にて侮ると俗人もちと心得る人ハ甚少なきなり
者と思ふなり今の外科も右の躰なるや婦人小児眼科口
科名家となり内科の指引ハ保ハ獨立するを外科計
獨道を行きぬハ口惜き事なるなり平竟彼の八安六齋
なんとふ論拙の係成の係ハ科拙ニ惜ハ私三星同道の膏
藥油藥計を以て腫物の寒熱虫害を知ふと称ハ滅法を付る
膏藥計貼ると迚一ヶ年長崎なるて阿蘭陀人の形勢(カリサイ)船の
孤る拡遠見(ミンケン)しハ未(ミ)將なる長嘗吐と書るなり直伝しなと

いとゝ弱かりし療治も屢る因る仕合続けまハ諸医
方へ住度ものすれども元来無学ゆへ内科の医へ附て出
たるゝ自然と内科ものゝ様なる様なるなれ共壮年の
頃よりまを憂きまを阿蘭陀醫書を見る事ハ勿論
今ゝとなりても飜譯なりてハ固より我ハ一向阿蘭陀流
を歩して唐流を建立しまものと思ひ込まも自我作古
ほとの器量ハ勿論ニして日月を送るを如何て嬉ゝ三省
まきを以語を聞も汝何ゝて江戸表まて高識の人を尋此
事如何ゝまと命じまるゝ短命まを先ゝて医老を

取早鈴傾き氣力ハ衰へ日用の事さへ指支まする様也
殊ゝ眼目ハ弱年なり如何ともすへき様なし中ゝ
我死まる後なりとも何乎此志を継き一家をなせと教る
なり江戸表ハ広き事なれハ此志を建立する
人ハ有ゝ又阿蘭陀醫書を飜譯しまる人ハ有へしゝ
拙の書ハ不迷ゝ様ものゝ如かゝ中ゝの大業ハ都會の地
ゝ豪傑の人起ゝ唱出ゝまハ如何ゝ事ゝ成り阿蘭陀船
日本へ来ゝ始ゝハ幾の頃なるや年代ハ忘ゝれ共二百年
前後なるゝ人夫を今迄の阿蘭陀の醫書沢飜

渡せる移の人なりしかハ今頃ハ蘭語の書あるこそ如何なる邊の地に居ていかなる人なるや未詳なり

扨又阿蘭陀の船にハ人數多乘組なれども船頭を水主樽取の類高人なるへし夫に雇ひ船中一通りの療治をなす渡世なる醫者にて名人ハ多き中なり且世の諺にも馬奴船脚(ムーカタセンドウ)などいふて劣なる者にて百なれハ阿蘭陀にも貴賤公子ありて貴賤なれハ從て行く者なるハ彼地にもなきにあらず下賤者なるへしなれども持參する膏藥油藥の功能を以て世間書にいふ阿

蘭陀傳書と号し道壁隋珠恭しく秘して金匱玉函に藏し其文言に極美念の深なるにや才一に貴賤公子搢紳の稟受の薄きと農夫野人の稟賦の厚きと療治の遠近苦なるに藥方計りなるにあれハ療治の術を不知して滅法に膏藥を貼也才二にハ婦人嵬の治方に遠近苦なり是近思老婆なる阿蘭陀傳書にも甚分ケて書なる不見才三にハ眼科の事不委少し才書にも亦唐流なり其才一に言かしし委敷阿蘭陀傳書江戸京にハ百へ或と

田舍より京に改る迄老ハ不治仰ぎ奉る天正以前の毛利
氏ハ中條帯刀ゟ代々の大器量の醫者有て蠻國へ渡り
妙術を傳へ来るなれは日本の重寶となる事も有へきに
耶蘇宗の禍ちを　御制禁なれ成ざるなり　嚴命
有りて阿蘭陀の醫者とて　百年日本の学力ゆゑ人々ゟ
　仰ぎ彼地の醫書の翻譯出来ざるハ正真の阿蘭陀
流も成就せ難き事なれ今ハ其事なるゆゑ不及
是非唐流外科迄立するゟ外の事なし　其内
治を求る唐流ゟ遠郡ゟ来れハ利に得る為ゟ

すゝ代例の悪性なれ日ゟ非常なる故ゟ流一生解魔
法師同様ゟ杉果るなるへし　江戸へも二十五六年出されハ今
の風ハ改なるゟ　江戸ゟ加賀の人々ハ皆泉客ゟ来りぬ
ひもゝ面白ゆゑ二十年前ゟ此て学ひ付き彼地
ゟ来る者ゟ吟味を盡し　なれは阿蘭陀流ハ出来ざる唐流
外科なりを建立する事成へ　ゟ日暮途遠しゆゑ
ゟ新し耳目ハ遠く行歩ハ不自由なり何方ゟ可往拙も
なく残念ゟ計なし弱年の子供等成長の後江戸へ出し
なハ此物語の趣を以て　長崎ゟ志ざき新ゟ出精

候段々万事伊孫松甚一御ヶ合ニ相成導ニ入
存ぜ候取集め長沢此ゟ御失念ぜ候段々存寄托
の心ゟ恵考悪筆をもつて認ぜ変蕪字ゟ多ぜ書直
させ申ぜ明日ゟ外ゟ此趣ゟ御世話有ゟ之ハ未ゟ仰
ゟ依ゟ之言も回報ゟ存印章ゟ進ぜ全

明和七年閏六月十八日

奥州一関

建部清庵

鶴齋杉田先生答書

清菴建部先生和蘭外科者流ゟ儒御不審逐一拜
見仕深ゟ奉感心ぜ天涯相隔御一面識ゟ高生
得ゟ實ゟ吾黨ゟ知己千載ゟ奇遇ゟ奉存ぜ候
趣應御不審左ニ相認申候
和蘭人年々日本ヘ来ぜ漂
外科ゟ伝ゟ和ゟ内科ゟ云ふ

ゝもの存ぜぬ者ゝ所初船の入港致候時切者なる外科
なるもの種々奇術を施せし時の通詞うれを見て外
科をもて免せるゝ根元となり夫より日本ゝ俗和蘭醫
を外治のゝ正しい事ゝ心得ぬ者ゝ存ぜぬ者ゝ多く
ゝ外科専業のゝ人まて出来ぬ得ども内科と兼業ゝ
去なゝ打ゝ内科ゝ人ゝ多くゝ内科
の事ゝ「ヘチース（ール）」外科の事を「ヘールメースステル」とゝ
和蘭といへども風寒暑湿云々之條
御不審御なるも依前條ニ辨ぜ通風寒暑湿並

婦人小児ゝ疱瘡 膏薬油薬計にて善ゝ成ぬ者ゝ
相用ゆ彼國語ゝ「イン ヒエンジケ（子ースミッテレン）」とゝ
薬湯丸散ゝ外種々の製薬方法唐日本より ハ勝ゝ
ぬ御ぬ者ゝ御存ぜぬ者ゝ逐ゝ書付ゝ活度可申ゝ大躰治療
仕方唐にて汗吐下三法ゝ相聞ゝ申ぬ者ゝ「デリーヲー
ペンデミッテレン」とゝ三業開塞法ゝ事ゝ存ぜぬ甚ゝ下劑
を用ぬ所ゝ「スポイト」とゝ水銃器ゝ肛門ゝ薬水を入れ
法ゝ存ぜぬ其術を「キリステル」とゝ唐にて「ヒ」ゝ審
法ゝ似ぬ業ゝ外ゝ法其間没ゝ其切遥ゝ劣ゝ拙の

類奇法異術居日本と八遠い事多御座候且絵物
の八蔵狭名の六助り類長崎へ行帰候て阿蘭陀外
科と称候彩迚も薬賣同様の者吾輩の論説と異候
者ハ多御座候

和蘭本草之部

是ハ「ドニュース」与申人著候「コロイトブック」と申大成の書御
座候並ニ「アブラハムムンチンク」与申人著候「アルドゲウワッ
セン」其外「ヒ井ニン」与申人集候本艸ニ彩色の写真畫
ニ書御座候可申も土産釋名氣味功能不委説

有之候又禽獸ニ忘候蟲ニ説きヲ以書り「ヨンストンス」与申
人著候大部有之候金石と説申い書ハ「スタイステマタ」と申ニの
御座候右諸書所説を傳候ニ譬ハ蟲魚の類ニてハ甚蔵腑の
形状異同多ク雑有之候ニ自國の産物のミ不通高
くしい程の四方万國の産物迚も遠く集ル有ク甚説の
精密成事本草綱目抔の及ひ者ニハ無之候
醫書多渡候哉ニ御不審
内景を説候書ニハ
○コルムス○ブランニールツ○カスパリュス○コイテル○パルヘ井ン

○ハルヘイン何まゝ人の名

右の諸士著述類是迄見覚る書数十部

治療の書ハ

○ヘタローストロースト内外醫書○ボ井セン内科の書○ブカン上同

○アンブルシスパーレ醫家に係りし事集成の書なり○アポテーキ内外方彙之書

○ウヨ井トシカットカームル内外醫方法集成の書○ショメールホイスホウデレーキ右に同○ヘーストル内外醫書二通○ホウチュルン外科昏

○ワアペンホイス右に同

右之類醫家なるべし書計も影響御座候遠外題記不

ト申候是又御望の者迄の書付入御覧可申候

日本にて和蘭外科傳書数多有之云々之儀

御不審御尤に存候如何不審皆和蘭方にて膏薬油薬に属の外科書の論説を加へ著述致候者と相見へ申候漸楢林流を取扱候金瘡之書近来京師にて伊良子氏外科訓蒙圖彙と外題一板本を出し申候者是右に申候「アンブルシスパーレ」氏申書の金瘡の部計少々和解致候ものに候哉去其内又彼の作者の用意し事書き加へ申候今和蘭書和解と雖申候共先ヶ程位和蘭之事に通候書是迄

見當不申候ゝ今楢林流ら唱ふる人の療治並仕掛の書とゝ云類世間並の和蘭流ゟ御産ゟ此類皆一家くの書とゝ云得者宜くもいくんなれと御説ゝ通正真ゝ和蘭流とゝ申ゝ沢ゝの奉存ゝ

和蘭文字ハ日本のいろは同然の像

御不審ゝ通和蘭國字ハ日本のいろはの通音ゟ字の義ハ無ゝ其六字三十六三ゝ數字九ッ合ゝ拾五有ゝ書體ハ「メルク」「ドリュク」「テッキ」抔迚數體御産得ゝ迚數遠ゝ産ゟ和文字と並ゝ一語を迚ゝ

「スペルド」ゝ云ふの日ゝの俗名ゝ同一事ゝ御産ゟ文字ゟ見ゝても言葉書ゝ言葉ゝ通一事ハ多ゝ間数の御不審ゝ成ゝ産ゟ是者先ゝ和蘭譯家ゝ從ひ日用の説話と見ゝ或ハ是と書習ゝ和蘭書ゝ字彙の如き書有ゝ「ヒーリン」「ハルヒ」「ハンノット」「ロケース」抔ゝ人の著ゝ申ゝ「ウォールデンブック」と書多御産ゝ是ゝ一語ゝ工夫と見ゝ字彙ゝ畫ゝて曉解ゝ年月ゝ重ゝ得ゝ自然ゝ言葉數と見ゝ段ゝ讀馴ゝ得ゝ風俗事語迚も相知ゝ抔其書ハ何の為ゝ澤山有ゝ哉と

御不審も可有之候ハ彼地方の風俗ハ諸國の言葉近
き為に其國の術藝をも学ひ得ハ為に異邦の辞を和蘭
語を注釋し和蘭語をハ異邦の語を注し書をも
二通りにて之を其注釋と為る譯なるハ言葉にて
読合考合ハ得方次第〳〵ハ相分ハ又言葉ハ風俗并方
言等も可有ハ御不審御尤に奉存候ハ天經或問
等の書にも有之通総世界を四ツに分チ一ヲ亜細亞（アジア）亜弗
利加（リカ）三ヲ歐羅巴（エウロパ）四ヲ亜墨利加（アメリカ）とハ其亜細亞に属ハ日本
唐朝鮮琉球等言葉ハ各異なれハ得て文ハ同文なり

漢文に書ハ漫に此ハ國ハ通ハ其ハ和蘭（ラテイン）拂郎
察（フランス）等の属ハ歐羅巴（エウロパ）洲中ヲ通ハ言葉を羅甸（ラテイン）と申候
是彼方の雅言の類也是を「ホールラテン」ウォールテンブッ
ク」と書ハ書を穿鑿致ハ得を相分りハ「ラテイン」
と申ハ彼諸國の語原を云ハ故醫書なりとも先
「ラテイン」を本名を書き直に其下へ國語を注
書を為ハ夫ハ雅俗を能分ハ其和異邦の言葉ハ交ハ
を集ハ書を「ヲールドシカット」と申ハ
参考ハ得を能分ハ

是まで日本に傳来たる和蘭流の科書薬名一切に等て
由緒不審なきものは是も只今迄和蘭流に外科和蘭
学に文盲なる「ラテイン」も國語に等しく甚分明に任せて書るる
故一向其言葉分明に成ぬ其上日本の俗名に
何の氣もなく和蘭語と書く事なく轉音不少ものも
日本の外は何もの國にても二合三合迄濁ぬ顔に言
葉多く成れば日本にては漏合羽土瓶抔の類いにて
此成に一躰彼國の言葉は大ひに違ひ事なれば抔
とて如何方にて大難も燒き醤も一つに相成ぬ譬へば

燒酎の事を和蘭語「ブランドウエイン」とゝいへば「ウエ」乃
二字を一つに寄せて書に濁を自然に音韻協ひぬ又薪
の事をブランドホウト」又火事の事迄「ブランドホイス」「ブランド」
とは燒る事「ウエイン」とは酒の事「ホウト」とは材の事「ホイス」とは
家の事なれば趣に推て彼國の言葉の意味迄無
なき故に又是迄傳来に和蘭藥名不分明御座と
ゝは譬言は世に「スボートー」とゝいへば「スートホウト」の名遠く
成に成る全く「スートホウト」は甘草の事甚奥敷しく
音なきものを「ドロップスートホウト」とゝいへと唱へ

語を「ズボートウ」抔傳来ひ弱き婦女子にて此れを治
療あ可しと来れ
當世にて和蘭外科と呼ぶ醫者は本来和蘭の醫書
を不傳授其聞書を傳書と称し己が家々に秘し家傳
にて歸して膏藥付貼一切文盲なるより四醫の
指圖計を受ケ自然に其の拙なり行ひ事殘念な
る事なり方法なる極に古来和方と年来相違
故迚も和蘭にては出来ぬ況や況唐流の外科と存彼
唐の外科書をもて見れば何の書も不分く故に

外よりの療治方も今日和蘭外科者流の方勝れ
ども金躰上代周の頃は醫の道甲乙疾醫瘍醫に分り
て戦國に經有志士は一國の主も可成と心
懸醫者抔は成る人なく柔弱者多病の者は醫者に
出て語る事は道家は混し内外醫道大に裏激し別る
外科は大きなる業故拙文者に人鮮し四醫の片手
なる成て唐の外科は絶て同然の事と存ぜ漸く
宋元の頃なて一家を唱へ千金方外臺秘要抔に取
ちきて外科に建立し皆ものに内治外治なるし

外科の業は下劣成る者の業にして
唐人の癖として減多に生死を名医増し病つとめ
療治の規矩立ざるは推こと存ぜず去肉の事は唐船話
きはめて少し幸ひ日本へ和蘭の膏薬油薬其術
を少しは傳へ伝を受て家の秘方を見ること有り
唐の書よりも又日本の妙薬を一ツ〻〻文政澤文
一日本一流の外科建立こと弱年の頃より無病
つとめ簡約根太腫物吹出物とも
の意味部を分ケ変なく唐人にても日本

流の外科為る可申与著述を相企草稿七八巻も出来
仕れ共一巻〻巻首〻趣意
瘡瘍之名極多矣而癰疽居十之七八也如發脇
發臀者曰脇癰臀癰發腦發腕者曰腦疽腕疽千
金方曰癰疽發十指也而發背其尤者也瘍醫之
業莫大焉歴代名家癰疽則分發背為一條而庸
輩或惟以發背者名癰若疽焉等是生一體〻瘡
腫而陰陽輕重之分也何異而治之孫一奎既先於
我曰五發疽通治又陳實功獨言癰疽發背之

治耳蓋取仲景立方於傷寒而雜病皆準焉翼
私淑而倣之庶幾其道易簡而使從吾遊者易
知易行也

集驗方曰癰疽之名雖有二十餘證而其要有二陰
陽而已　以下畧之

ヶ様ヶ仕古人の語一言半句ヶも心ヶ徹れそうり按き
而つ免治ヶ付病ヶ変化ヶ従ひ術も附申い和と
五十年ヵ〜ら四十九年の非を知とやら二三年ヶ前
不圖前除ニ〜ゆヨルムスヤ人著置ル図景の書

ヶ様ヶ図ヶ〜ヶ〜ヶ〜ヶ蔵ヶ人の形骨骨の数ヶ畧ヶ〜骨
屈ヶと遠ヶ〜ヶ〜ヶ〜ヶ不審ニ存羅ヶ〜ヶ刑餘の屍ヶ〜観蔵
ヶ〜ヶ〜ヶ人有ヶ〜ヶ〜ヶ幸ヶ〜ヶ存其節ヶ〜ヶ同伴ヶ見申候
骨ヶ〜ヶ職府骨節漢人ヶ〜ヶ所説大遠ヶ〜ヶ〜ヶ和蘭図
ヶ合骨ヶ〜ヶ誠ヶ鏡ヶ〜ヶ〜ヶ寸分遠ヶ〜ヶ〜ヶ依ヶ〜ヶ大
憤悲仕幸中津侯ヶ〜ヶ侍醫前野良澤ヶ〜ヶ内科ヶ〜
和蘭ヶ〜ヶ志有ヶ〜ヶ仁ヶ〜ヶ府ヶ此人ヶ〜ヶ先年蒙　京命和蘭
語通譯御ヶ〜ヶ成ヶ青木崑陽先生御門人ヶ〜ヶ御ヶ〜ヶ
御撰述ヶ〜ヶ書御侍ヶ〜ヶ成ヶ〜ヶ是ヶ〜ヶ〜ヶ熟慎陪紀ヶ〜ヶ

数年ゝ後渉て和蘭ゝ業理解いたし猶不審ゝ度ゝ
申ゝ長崎表ゝも一度越擇家ゝ従い是を正し申度
不打拵ゝ和蘭醫学ゝ出精ゝ成就ゝ此人ゝ主ゝ
又同藩中川淳庵ゝ者内科ゝ専ゝ物産ゝを好ゝ
ゝ是又和蘭学ゝ志申ゝ右良澤ゝ監主
ゝ同じ学引一冊拵ゝ六經ゝ読ゝ人ゝ及ひ
申ゝ存念ゝ学ひ打寄議吟味ひ申度實ゝ不昧者心ゝ
申ゝ次第ゝ御猶又着實ゝ味ひ度骨ゝ
系拵ゝ有ゝ枯骨ゝ学者ゝ者ゝ可

有ゝ度ゝ和蘭書ゝ有ゝ度ゝ禽獸ゝ剖見
ゝ度ゝ和蘭人所説蓋相分ゝ内ハ漢人精ゝ存候
所大遠ゝ却ゝ甚深ゝ海産ハ譬ハ漢人の説天ゝ日
月ゝ人ゝ目あゝ理ハ高遠ゝ聞ハ得ゝ推ゝ
理ハ窮不ゝ和蘭人の所説ゝ眼ゝ初ゝ
其学ゝ出あゝ又ゝ所ゝ雞卵の白味の形成ハ水ゝ其
水ゝ方物の影ゝ初メの水ゝ三段ゝ事
千里鏡ゝ回ゝ理ゝ見ハ初又舌ハ骨ゝ産水和蘭
語「トングベーン」ゝ

水得る婦人の乳も肉塊也舌に肉塊なるに舌は自在なる
して乳は不自由なり舌の自在なるは肉なる骨あるが筋挛に
乳房骨無筋不能挛也先ッケルの類其精と三千年来
所未説也依て不及如鳩摩羅什に爰見て翻譯解
體新書と書五冊出来いまに校合相成不申ば加
之未ダ此近ごろ出来可申甚約圓成出来水ヲ入ル迫
申ば是まで大筋通過抜ケ来水抽ケ戻ても上代
も乗安くおぼえへ今直に刮所に考合い潰る因
便抜て能和宜出所あるべ申ば慎骨者神氣所使

之發舌者也ごとく類彼是故符合いるの無者ごとく於
後世ごとく脱漏のごとく張景岳抜申し魚骨を以て
脊骨を定横骨抜ても自己の見ごとく注加申し横骨即喉
上軟骨也下連心肺故為神氣所使上連舌本主舉發
舌機又十四經絡發揮及註證發微ごとく類又皆項骨約
有三椎といひ又を鍼灸聚英膽經懸鍾穴石絶骨
尋摸尖骨者乃是絶骨を説り今直に刮見るに所は項
骨七ッ絶骨ハ和蘭人所説の「ペイス」と申大筋の畫る所
ごとく骨ハ来ごとく水如此類差ごとく殊毀油産水無神濟人

と説くに思ふに滑伯仁張景岳等の説の如く一孤に
帰するは何ぞ人身に智愚賢不肖の差別
なく一躰同一なるべきに孤なるを名自足の
道一家先生新奇の説を唱ひ何ぞ是迄の説を
取捨せず千古相定不易の疑ふべからざるの理を
是等を以て御考ひ潜に漢人を固の上に尋探して
了簡を定めなさるべしと御へ申上げ本元の経脈腎
度を孫御逸水唐の醫書甚詳説甚論不尽仕候是迄
度の書結るに存ぜず建に二中良水日本流

外科取建水事相心メ何恐り和蘭正流の醫道建
立仕度為存立ひ先固景に醫道の根元水右の
書より翻譯相初メ申ひ桂又此上同志に与の合逐に致
度配一書にも致翻譯水仕るに存水前条に申へ
ステル」外科書翻譯に可申与迫頃に等御探申ひ
平外醫方藥物等も段に与御掛り度心願に存ひ
年去私儀當年四十一歳と申ひ罷成弟に近来眼病數
度相煩眼力に薄く相成水中に生涯に大業遂申ひ
て為に等見ずに仕同志に固桂川法眼の面合意并右

ナレ淳庵抔モ年ニ幾ツカ数ヘ後ニ和蘭流
醫術成熟可仕ト
和蘭船ニ乗来ル者ハ多クハ世の清ヨリ馬奴船脚の類
ナルヘシ　されいとれなを雇ヒ来ル醫者のミハ得ト
上ヒ中ニ参リ多ク安ク　御石審御尤ニ存ル
ト去ル彼の國風俗ハ外國ヘ通ルの使ニ仕ル
即國王ヨリ送ル者ハ商船ニハカ此方ヘ来リ
「カピタン」ヨリ送ル者抔交易総管の官人ニテ其中ハ貴人
公子モ来ルニ付ヨリ正使の須ヒ来リ「カスパル」

ヨリ醫者抔モ上ヒ来ル彼國の書モ評判有
ニハカ前件數條老先生ニ御不審相御深切ニ
奉驚入ハカ不偽従来の存念自負のミ捨ても不顧思召
ヤ此ハカ諫ル書ニ書言ニ如ら何卒御面會仕度ニ同
志ニ者ヒ御導仕ル此趣ニ為ル達の御ニ上
安永二年正月

和蘭醫事問答巻之上